Magic×Magic

七つ夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｇｉｃ×Ｍａｇｉｃ

【Ｎコード】
Ｎ９８５１Ｙ

【作者名】
七つ夜

【あらすじ】
なあ、誰でもいいから俺の話を聞いてくれないか。
多分だけど、俺はごく普通の高校三年生……のはずなんだが。
少なくとも、夏休みが明けるまでは普通だったんだ。
勉強だって、スポーツだって、それなりにやって。
本当に平凡な生活を送ってたのに。
なのに、なんなんだよ、コレは。
――なんで、クラス全員が、お互いに殺しあってるんだ？
で、何でお前と俺だけは無事なんだよ……なあ、冴儀（さえぎ）。

魔法系バトルストーリー。

start?／no，but．．．

九月一日。
夏休みがこの日の午前零時を以って終わりを告げた日。
天気は晴れ。
空を見ればモチベーションが急上昇しそうなぐらいの快晴。
その恩恵を窓を開けた瞬間にバッチリ受けた。
まあ、テンションに関しては既に上がりきっていたんだが。
夏休み中の起床時間（勿論、昼まで寝ていた）より六時間ほど早起きしてしまうぐらいに俺の気分は高揚していた。
クラスメイトとは夏休み中も結構遊んでいたが、やっぱり学校で顔を合わせると言うのは、またそれとは違った何かがある。
嬉しさ……じゃなくて。
楽しい……も、ちょっとズレていて。
ああ、くそ。説明しづらいな。
まあ、きっと。
……普段あたりまえに感じているからこそ、そういった感情の正体は掴めなくなってゆくものなんだろう。
よし、ちょっとぐらい早く家を出てみるか。
そう思い立った俺は、一連の準備を済ませて（着替えとか教科書詰めとかだ）家を出た。
時刻は七時。
何故か後ろ髪惹かれるような気がしたので振り向いてみる。
……あ、そうか。
俺、宿題全然やってないんだった。
ふむふむ。
まあ仕方ない。
こんなことで俺の心から迸っている熱いパトスは止められないんだからな。

学校に着いた。
アインシュタインは偉大な科学者なんだと痛感した。
時の流れは楽しければ楽しいほど速く進むってのを、今完全に俺は理解したぞ。
……あれ？
やけに学校が静かだな。
まあ、俺が早すぎるんだけどな。
この学校には上履きというものが存在していないので、そのまま階段を上っていく。
かつ、かつ、かつ。
靴の音がよく響く。
繰り返して四度。
踊り場を経由して（勿論、ココを通らなくちゃたどり着けないわけだが）三階へ。
まっすぐ自分のクラスの三年三組を目指す。
歩きながら、ふと思い出す。
あ、鍵取ってこないと。
早くに来すぎたから、多分入れない。
……一応見てみるか。
まあ、もう教室のドアの前まで来てるからな。
俺みたいな物好きもいるかもしれないし。
ドアに手をかける。
横に力をかけると、ガラリと音をたてて開いてくれた。
――パチッ。
そんな音が頭の中から聞こえて。
「やあ、ようこそ。……地獄の始まりへ」
そんな声が聞こえた気がしたけれど、ただ身体に引っ付いていた耳が音を拾っただけで、既に俺の頭は働いていなかった。

start?／yes，so．．．

なあ、誰でもいいから俺の話を聞いてくれないか。
今見ている光景が、どうにも頭で理解できないんだ。
客観的にこの光景を見られる人を募集してる。
さて……オレは、とある高校に通う普通の人間……だったハズなんだが。
少なくとも、夏休みが明けるまでは普通の人間だったんだ。
なんでもそれなりにこなしてきた。
平凡をこよなく愛し、平穏をなによりも望んでいた。
……なのに、何なんだよ。コレ。
なんで、クラスの生徒全員が、机や椅子で殴りあってるんだ？
……というか、コレじゃほとんど殺し合いとなんら変わらないじゃないか。
なぜ、コレを放っておけるんだ、教師たちは。
他のクラスの生徒たちは。
……オレの視界に映っているこの光景は、なんだ？
この地獄は、なんだ？
あまりの事態に体が動かない。
誰か、オレを助けてくれ……！
時間を巻き戻してくれ、神様……！
――ざ、ざざざ、ざざ
ノイズが頭の中に響いている。
それがうるさくてうるさくて。
――ざざざざざ、ざざざ
頭の奥から、この雑音に飲み込まれて。
――ざ、ざざざざざ。……
頭の中が綺麗に流されていくようで。
――パチン。

オレの意識は、雑音の波にさらわれていった。

◇◆◇

「――っ！」

飛び起きる。

パジャマは汗でじっとりと濡れている。

嫌な夢を見た。

学校に行って、教室に入った途端にあんなことが起こっているなんて。

ベッドからふらふらと立ち上がり、窓を開ける。

風は無かった。

ただただ残暑の熱光線が撒き散らされているだけ。

「……ん？」

そんな地獄のような道を歩いてくる男が一人。

確か、同じクラスの市ノ瀬だったか。

妙に弾んだリズムで歩いている。

見るからに楽しいんだということが伝わってくる、そんな光景だった。

なんて、幸せな風景なんだろうか。

――その幸せが、もうすぐ潰されるとも知らずに。

「誰かいるのか！？」

声が聞こえた気がして振り返る。

部屋の中には、オレ以外誰もいなかった。

……ただ、嫌な予感だけが残っていた。

見ていた夢が、頭の中にこびりついて離れない。

「クソ……ッ！」

コレが気のせいであることを祈るしかなかった。

私は着替えもせず、弾かれるように家を飛び出した。

◇◆◇

久々に通る通学路を全力で走りぬける。
何かが告げていた。
早く止めなければならないと。
「はあっ、はあっ、はあっ――」
息も切れ切れ、それでも走る。
（……市ノ瀬、どこだ！）
走って、走って、走って。
もう目の前には、学校があった。

◇◆◇

「はあっ、はあっ」
何とか、クラスの前には着けた。
だが、市ノ瀬は見つからなかった。
「……クソッ」
とにかく、確認するしかない。
この嫌な予感の正体を。
教室の扉に手をかける。
がらり、と勢いよく開けた扉の向こう。
私の目の前。
そこには椅子を振り上げている市ノ瀬が――。
――衝撃。
なんとも形容しがたい痛みが続いている。
何度も振り下ろされる椅子。
悲鳴をあげるオレの身体。
何度か、ヤバい音も聞こえた。
……ああ、リセットしたい。
――そうだ、リセットしてしまえばいい。

こんな都合の悪い夢はリセットしてしまえ――。

◇◆◇

「……あああああっ！」
叫びながら目を覚ました。
ぜえぜえと激しく乱れた呼吸が続く。
汗が頬を伝って顎から滴り落ちる。
市ノ瀬が、オレを殺す夢だって？
そんなことあるわけないだろ――
「……痛ッ！」
頭がまるで割れているかように痛む。
さっきの夢で最初に殴られたところと同じところ。
手で触ってみたが、血が出ているどころか腫れてさえいない。
痛みと現実とが釣り合っていない。
とにかく、休むか……。
こんな状態じゃ、学校には行けない。
「待って！」
いきなり声が聞こえた。
誰だよこんな朝から。頭に響くわ。
……ん。
この声、聞いたことがある……？
「もしかして、アナタが時間を巻き戻してるの？」
時間？知るわけねえ。
「とにかく、この事件を解決したいなら私に手を貸して。
私は時間の巻き戻しの影響をあまり受けない。きっとアナタの力になれるから」
……。
その日、オレは学校を休んだ。

◇◆◇

次の日。
ニュースを見た。
「〇〇県の△△高校で生徒同士が暴行事件を――」
――リセットだ。

◇◆◇

「〇〇県の△△高校で生徒同士が暴行事件を――」

◇◆◇

「〇〇県の△△高校で生徒同士が暴行事件を――」

◇◆◇

「〇〇県の△△高校で生徒同士が暴行事件を――」

◇◆◇

「……なあ、そこのお前」
目を覚ますと、すぐに声をかける。
「いるんだろ。……出てこい」
「……わかりました」
ベッドの横に突然、人が現れた。
流石にビビる。
「……ヒルカメレオン？」
流れるような黒髪に、結構可愛らしい顔立ち。
そんな美少女だったが、思わず言ってしまった。

「それ、普通にカメレオンでよくないですか？何故ゲルショッカー風に」
……わかるのかよ。
ブラック将軍を知ってるなんて、結構なマニアじゃないだろうか。
「……とにかく名前。教えてくれ。手を貸して欲しいんだ」
その少女は、変に芝居がかった風に（見ててかなりダサい）名乗る。
「冴儀、凪。――この世界の支配者よ」
美少女っていうより、これじゃ『微』少女だな、なんて不覚にも思ってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9851y/

Magic×Magic

2011年11月29日20時50分発行